アイランドキャンパス事業成果報告書・提言書

事業名　甑島考古学の魅力の再発見―住民との共同調査を通じて―

代表者　鹿児島国際大学　大西　智和

（1）　事業成果報告

1.　事業の概要

甑島では、貴重な遺跡やそこから出土した遺物が確認されており、それらは甑島の歴史を知る上で重要な手掛かりとなる。しかしながら、現状ではそれらの文化財は十分に活用されているとは言い難い。甑島に存在する遺跡や遺物の意義、重要性に対する理解を促すため、平成24年度に下甑町手打貝塚において、小規模な発掘調査を住民の方々と共同で実施する予定である。平成23年度は発掘調査地点の選定、および島内の遺跡や考古資料を対象とした文化財活用の可能性を探るための調査を実施した。最終日には、甑島における調査成果も盛り込んで、講演会およびワークショップを開催した。

2.　遺跡・遺物の調査

2.1　下甑町内での調査

遺跡の調査

下甑町内では、大原・宮園遺跡、新田神社周辺（遺跡）、手打貝塚の踏査を行った。大原・宮薗遺跡は古墳時代の埋葬遺構を中心とする遺跡、手打貝塚は古墳時代を中心とする遺跡であり、出土品も比較的多く確認されている。新田神社周辺（遺跡）では発掘調査は行われていないが、多数の遺物が表採されており、下甑郷土館にも収蔵されている。

これらの遺跡はかなり広範囲に分布していると考えられ、古墳時代のこの地に比較的大規模な集落が営まれていた可能性が高いといえる。

大原・宮薗遺跡は、鹿児島県では発見例の少ない埋葬遺跡であること、手打貝塚は全国的にも例の少ない古墳時代の貝塚であることから、積極的な活用が望まれる。しかし、大原・宮園遺跡、手打貝塚には、遺跡の位置や概要を紹介した看板だけしかなく、遺跡の広がりや遺跡の詳細を知ることはできない。これらの遺跡の近くに位置し、しかもそれらの遺跡の出土品を収蔵・展示している下甑郷土館との一体化した活用も必要だと思われる。

なお、来年度発掘調査を予定している手打貝塚の調査地点の現況についても確認した。事前にレーダー探査が実施できれば、効果的な調査区の設定を行うことができると考えている。

遺物の調査

下甑郷土館では、大原・宮薗遺跡および手打貝塚の出土遺物を中心に資料観察を行った。

昨年度実施した調査によって、遺物の多くは古墳時代の成川式土器で構成されており、土器文様などには甑島独自の地域性が認められること。弥生時代の土器も少量出土してお

り、現在の熊本地方の特色を持つものが多いこと。弥生時代後期の甕の一部には、土器に含まれる鉱物の特徴から、島外から搬入されたと推測されるものがあること。展示されていた大原・宮薗遺跡の壺棺は、古墳時代の葬送様式を検討するための重要な資料であり、甑島の古墳時代の葬送儀礼は、同様の葬送様式が盛行した薩摩半島南部との交流が基盤となっていたことを示すと思われること。植物繊維を含む焼成粘土塊が展示されていたが、これは土器焼成の窯の一部とみられ、甑島で土器製作が行われた証左となること、などが明らかになったり推定されたりしていた。それらの資料を対象にした土器圧痕調査で、イネやツルマメの圧痕が確認できたため、本年度はそれらの圧痕を有する土器の実測図を作成した。

なお、学生は各自の視点で資料や資料館の活用法を考察した。

2.2　里町の遺跡

遺跡の調査

中町馬場（里）遺跡の踏査を行った。本遺跡は縄文時代以降の人々の生活の跡が残された、里町を代表する遺跡である。発掘調査も数度にわたって実施されており、遺構や出土資料の状況も明らかにされている。出土品の中には九州本土との関係を示すものや、九州本土にもそれほど例が知られていない資料なども含まれている。

しかし、中町馬場遺跡の現状は宅地や道路あるいは畑で、遺跡の様子を知ることができるのは、わずかに看板によってである。ところが看板は文字のみによる説明のため、遺跡の位置や広がり、どんな出土品があるのかを、具体的に知るのが難しい。

公民館に保管されている資料と遺跡との連携によって、活用を図る必要性もあると思われる。

遺物の調査

里町公民館では中町馬場遺跡の調査を行った。昨年度の調査では、縄文時代および弥生時代の遺物は、九州本土、とくに現在の福岡県南部地域や熊本県地域と共通性が強く、甑島と密接な交流が行われていたと考えられること。土器の胎土（粘土や砂粒）を観察すると、多くの土器は甑島内で製作されたとみられること。しかしながら、弥生時代前期の甕形土器や、中期の須玖式の高杯には、輝石など有色鉱物が多く含まれ、島外からの搬入が推測できるものもあったこと。また、弥生時代前期の甕棺の破片も展示されていたが、これは北部九州に起源をもつ弥生時代の葬送様式が、早くから甑島で取り入れられていたという点で注目されること。その他の遺物として、漁労具の出土が目を引くが、石斧や土掘り具など植物資源の利用に関わる遺物も出土していて、甑島では早くから植物利用を軸とした定住生活が営まれていたことをうかがえること、などが明らかになったり推定されたりしていた。

本年度は昨年実施することができなかった種子圧痕調査を、弥生時代の資料中心に 2 日間にわたって行った。そのうちの数点についてはレプリカも作成し、電子顕微鏡による同

定作業を行った。

3.　イベント（講演会・ワークショップ）について

住民の方々の参加を得て開催することができた。参加者数はそれほど多くはなかったが、講演会やワークショップでは住民の方々からの発言を得ながら進めることができた。

講演会では、中村直子（鹿児島大学准教授）が甑島の弥生時代の出土遺物から、当時の甑島が北部九州と沖縄との交流の中で、重要な役割を果たしていた可能性を指摘した。講演後には、参加者から中町馬場遺跡に関連した問題について質問があり、意見が交わされた。引き続き、鐘ヶ江賢二（鹿児島国際大学学芸員）がワークショップの趣旨説明を行い、その後学生たちが、実物資料やポスターを用いて甑島の遺跡や遺物についての説明を行った。自分たちで作成したポスターを説明したり、質問に答えたりしたことは、学生にとって貴重な経験になったものと考えている。

（2）　提言

甑島の文化財は、今回の調査によっても学術的にも価値が高いものが多く見られることを認識できた。これらの文化財は、地域住民にとっても財産となりうるもので、島外からの観光客にとっても潜在的な魅力を備えたものであると確信した。しかしながら、現状ではそれらの価値が十分に引き出されているとは言い難い。これらのすぐれた文化財を持続可能な形で活用するには、研究者や研究機関、地元の教育委員会や資料を有する施設による、住民への啓発的な取り組みを行い、地域住民に文化財の持つ価値を認識してもらった上で、活用への主体的な取り組みに関わってもらえるよう促すことが重要であると考える。

昨年実施したアンケートの結果から、住民が日常的に文化財に接する機会が少ないという状況が把握できた。そこで、住民が文化財と接する機会を増やすことが、まずは必要不可欠となろう。大学側としても、考古学をテーマとした出前授業や講演会の実施など、地域住民と接する機会を積極的に作る必要があると感じている。しかも、その活動は、継続的に行われるべきである。

実際に遺跡の発掘を体験する機会や、現地説明会など、地域住民が考古学にじかに接する機会を提供することが、考古学をはじめとする文化財の調査研究の意義や役割、学問としての醍醐味を住民に理解してもらうために効果的であると思われる。来年度予定している下甑町手打貝塚における発掘調査は、地元の住民に加わってもらって実施する予定であるが、考古学の魅力を体感してもらえる絶好の機会と認識しており、成果があげられるように、事前の準備を進めたい。

文化財の活用には、資料を有する郷土館や公民館の役割が重要である。それらの施設の展示内容の見直しや展示方法の改善、遺跡の現地案内板などの充実も今後の課題として挙げられる。展示の内容も、パネルに図や写真を入れるなど、わかり易い形で行われることが望まれる。また、展示の方法や解説についても、展示品を体系的に整理し、それぞれの

展示品の意義を理解できるように工夫する必要がある。これらの展示や案内板の充実については、いうまでもなく専門家や研究機関の指導・協力が求められ、関係者間の協議や事業次第では、本学の博物館実習施設（考古学ミュージアム）と共同で作業をすすめることも可能と考えている。

一方、研究者や研究機関側の知識や情報の提供だけでなく、住民側からの主体的な取り組みを促すことも、長期的で持続的な文化財の活用を図るには必要不可欠である。そのためには、文化財に関する事業や郷土館の運営などに、住民が積極的に参画できるよう機会を提供し環境を整備する必要があるだろう。たとえば展示案内のボランティアを募集し、地域住民が自ら郷土の文化財について解説を行うという取り組みが考えられる。長期休暇中には、小学校や中学校の生徒に、課題として展示解説を担当してもらうのもよいだろう。このように博物館や文化財の管理・運営に住民が参画する機会を設けることは、地域住民の文化財に対する理解を深めるとともに、文化財の持続的な活用に効果的であると考えられ、他の市町村では文化財に対する理解や住民主体の文化財活用の促進に成果をあげているところもある。大学側としても、住民主体の活動を維持・継続するために、専門的な知識の供与やアドバイスなど随時協力できるよう、環境を整える必要があると感じている。

写真１　遺跡の踏査（下甑町手打貝塚）

写真２　下甑郷土館での資料調査

写真３　資料調査（里町公民館）

写真４　集合写真

写真５　講演会の様子

写真６　ワークショップ（学生によるパネル説明）